



TITLE:

追憶文財部君を悼む

AUTHOR(S):

神戸, 正雄

---

CITATION:

神戸, 正雄. 追憶文財部君を悼む. 経済論叢 1940, 51(2): 232-233

ISSUE DATE:

1940-08

URL:

<https://doi.org/10.14989/131423>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號二第卷一十五第

月八年五十和昭

哀辭

故財部教授遺影署名及原稿

## 論叢

支那の農家負債と農地の抵押……………經濟學博士 八木芳之助  
水産資源の保全について……………經濟學博士 蜷川虎三

## 時論

東亞新秩序建設と新國民政府<sup>の發展性</sup>……………文學博士 矢野仁一

## 研究

民國初期の兌換券……………經濟學士 徳永清行  
自由貿易主義の吟味……………經濟學士 岡倉伯士

## 記事

財部教授逝く

故財部教授年譜及著書論文目錄

## 追憶文

神戸正雄 本庄榮治郎 蜷川虎三  
木村喜一郎 吳文炳 宗藤圭三  
青盛和雄 松岡孝兒 石川興二  
黒正巖 藤本幸太郎 谷口吉彦  
岡崎文規

## 附錄

## 彙報

外國雜誌論題

追憶文

財部君を悼む

神戸 正雄

財部君は此皇紀二千六百年といふ記念すべき年の、而かも事變勃發してから三周年記念日に當る七月七日に逝去された。友人門弟にとりては何時までも此日が記憶されるのに都合が良い。

財部君は私にとりては同僚として長い間の交誼を受けた方であつて、其交誼は不動のものであり、未だ嘗て同君と對立抗争したことの歴史を有たぬ。一には同君が私の講義を聞いたことがあるので、同君としては私をば先生として敬意を表して呉れた爲めでもあらう。但し師弟の關係と、社會人としての利害得喪の關係とは必ずしも並行するものではないが、其にも拘らず、同君と圓滿なる交誼を續け得たる快き思出を持ち得るのは、全く同君の内藏する徳の然らしめる所で

あり、私は此點につき同君に深き敬意を表する。

財部君は實に、私の京都帝大に於ける第一次の講義（商業政策）の聽講者であつた。當時私はまだ二十六歳の若者で、同君は四つ下の二十二歳の、殆ど何れが先生か判らぬほどの間であつた。同君は當時、數ある學生中、最熱心なる聽講者であり、屢々質問を持出し來りて先生に思索の端緒を與へましたし、又、同君の答案は最優等のものであり、隨つて滿點に近い採點をしたと記憶して居る。同君が母校に残るやうになつた時にも、私も其推薦者の一人であつたことはいふまでもない。

財部君は結局、統計學の專攻者となられたが、併し初めから此をやられたのではない。初めには經濟政策特に工業政策に興味を有つて居られたやうであつた。しかるに統計學を擔當する筈の、廣部周助といふ助教授の方が獨逸留學中に逝去されたので、其後任者として同君が其選に入られたのである。しかし同君が一旦其選に入り、海外留學を命ぜられた後になつて、統計

學には別の人を當てたらといふ意見もが學内には出て來たのであつたが、其が消滅して、遂に同君が統計學擔當の教授として落着いたのである。此間の消息を思出すときに、人の事攻も其人本來の希望と必ずしも一致せぬものであり、外部の事情により影響を受くるの大きいことを見るのである。

財部君は統計學者ではあつたが、其造詣は極めて廣く、經濟原論、政策、歴史、學史にも通じ、統計以外の講義をしたこともあり、論文もある。否な古書の蒐集を好まれ、本草學の智識も深かつた。狭い専門家といふよりは、間口の廣い博學の士であつた。そして記憶力が最強く、同君と話を居るときには、よくもこんなことまで記憶して居られるのかと思ふほどの事が屢々あつた。尤も同君は多讀の結果でもあらうか、其を纏めるのに苦勞されたやうであり、あれだけの博い學殖を有しながら、其發表されたのは其十が一にも及ばない。

財部君は學部長ともなり、評議員ともなられたが、

追憶文

此は同君が其時々の學部の色々の事情でなられたのに止まり、決して、同君が之に適任であつた爲めではない。同君は行政家でなく政治家でなく、全くの學者であり、學者として特色のある一人であつた。本を集め本を讀むことを何よりの樂として居られ、世俗的の勢力争には全く無關心であつた。隨つて人に對して世辭をいふとか、策謀をするといふことは大嫌であつた。

斯の如き人は學界の至寶として長く眺めて居たかつたのに、六十歳を一期として、停年を待たずして長逝されたのは洵に惜しい事である。同君に於て唯一つ惜しかつたのは酒を好まれたことであり、其が健康を傷けられた大なる原因となつたのではなからうか。實は私も嘗て同君の酒について忠告したこともあつたが、同君の容るゝ所とならずして其儘になつた。其は全く私の誠意の足らなかつた爲めであり、同君に對して相濟まぬことと思つて居る。